

# Newsletter 20

慶應義塾大学教養研究センターニューズレター第20号 / 2012年5月15日発行

## Contents

巻頭言 教育 GP を振りかえって——身体知と言語力、または「獣身」と「人心」

特集Ⅰ 教養研究センター開所 10 年

特集Ⅱ 教育 GP を終えて

特集Ⅲ 庄内セミナー

特集Ⅳ 教養研究センター選書自著紹介

特集Ⅴ 研究サポート「研究の現場から」

活動予定

私の〇〇自慢



### 教育 GP を振りかえって

——身体知と言語力、または「獣身」と「人心」——

教育 GP 「身体知教育を通して行う教養言語力育成」代表

武藤浩史（法学部）

Hiroshi Muto

教養研究センターを連携拠点として実施されてきた文部科学省大学教育推進プログラム（教育 GP）「身体知教育を通して行う教養言語力育成」（2009 - 2011）が終わりました。

内容を単純化して言えば、身体的気づきに導く体験型教育を通して言語力アップを図る試みです。福澤先生の言葉を借りれば、「獣身」を刺激することで「人心」つまり人間のマインドの中核に位置する言語力を高め、「社会の先導者」を育成する試みです。

「アート」、「フィールド・アクティビティ」、「コミュニティ」、「コミュニケーション」、「発信・評価・システムデザイン」の5つのセクションに分かれ、計42名のメンバーが参加しました。

その最終報告会が、1月21日に、来往舎シンポジウムスペースで開催されました。

3時間近い報告の後、外部評価委員としてお招きした川島啓二氏（国立教育政策研究所）、菅原幸子氏（横浜市）、香取早太氏（JTB）の三氏より、温かいコメントをいただきました。

川島氏がこんな楽しそうに教育改善をやっている場所を見たことがないと驚かれたのが印象的でした。日本中の大学を見てきた氏が言うのだから間違いのない話でしょう。ある意味で、一番嬉しかったのがこのことです。最低限プログラムの趣旨の中核は

尊重してもらいながら、参加メンバーにはできる限り自由に力を発揮していただくという方針でやってきましたが、それが功を奏したのでしょうか。手前味噌になりますが、筆者としては、福澤精神の自由闊達な部分を受け継いだつもりです。

また、氏は、大学教育は基本的な「インフラ整備」から「コンテンツの充実」に焦点を移す時が来ているという現状認識に基づき、破格のコンテンツを次々に繰り出す本取組の独創性と先駆性を高く評価されました。日吉キャンパスの教養研究センターというニッチな場所だから可能な「未来先導」的普遍性が存在することを信じたいと思います。

しかし、同時に、もちろん、楽しげやいというものではなく、自らこの取組を客観的に評価し、その評価に基づくシステム構築を提言する必要がありました。報告会の最後で、このシステム構築に関して興味深い質疑応答が起きました。政策提言的な大きな結論を期待する羽田功氏のヴァイジョンとは対照的に、不破有理氏と横山千晶氏の「女子力」コンビは、その種の提言をあえてせず、授業内の微細なコミュニケーションの改革を、システム構築の礎に置きました。なるほど、蟻や蜂たちが作るあの驚くべき巣は、でかい全体設計図ではなくて微細なコミュニケーションの賜です。すると、不破・横山ヴァイジョンも立派なシステムデザインではないか、と「鈍感で女子力に欠ける男の子」である筆者の「眼から鱗」が落ち、この二種類のヴァイジョンを相補的に活かすことの大切さにはたと気づきました（この問題に興味のある方は、本塾大学院システムデザイン・マネジメント研究科前野隆司氏の『思考脳のつくり方』もあわせてどうぞ!）。

『ベリー公のいとも豪華なる時祷書』（Les Très Riches Heures du duc de Berry、15世紀フランス写本）の「6月の暦」。干草を刈る男の足には筋肉が隆起し、干草を集める女二人の姿はしなやかで優雅、働く者の動きを精緻に捉えるランブル兄弟のまなざし。背後の城郭はセーヌ川沿いに建つベリー公のバリの居城。



**羽田功（2002年～2004年 所長）****時効……？——開設当時を振り返って**

教養研究センターの開設10年にあたって、初代所長としてあらためて当時のことを少し振り返ってみたいと思います。センター開設までの概略についてはセンター活動報告書第一号（2002年度）に記してあるので、裏話的な話をします。たぶんもう時効だと思いますので……。

当時、数年をかけて議論を重ねていた日吉キャンパスの新しいキャンパス・グランドデザインの目玉として、新研究室棟建設（現来往舎）と並んで日吉研究センター構想がありました。教員の研究活動の活性化が目的でした。しかし、塾執行部が鳥居塾長から安西塾長へ変わったことで、研究センターの中身も大きく変化しました。「教養」研究に特化したセンターを設立するよことの新執行部の意向です。しかも、センターとしての授業の設置は認めないとのことで、急な変更には戸惑いながら、と同時に手足とは言わないまでも片腕を縛られた状態での出発となりました。それがどんな内容であれ、「教養」の研究だけでは自家中毒を起こします。何らかの形で成果を教育の現場に生かさなければ、センター自体に存在意義ありません。そこでセンター開設後に繰り返し交渉を重ねて、ようやく授業設置が認められました。それが現在の「アカデミック・スキルズ」や「生命の教養学」につながりました。

その他、次々と設置される委員会で、一言一句にこだわりながら長時間をかけて行われたセンター規約策定作業のことなども記憶をよぎりますが、少なくともこの二つの授業をはじめとして、多様な「学び」を実験・実践するセンターの活発な現況を見ると、ちょっと隔世の感があります。

**横山千晶（2004年～2010年 所長）****予想外の夏——開所10年に寄せて**

人生、大概のことは「こうなるって最初から分かっていた（よね）」ということが多いのですが、まったく寝耳に水のこともあるものです。私と教養研究センターの出会いは爆睡中の水爆弾。2004年の7月初め羽田功所長が牽引する教養研究センターの所長・副所長懇談会に突然呼ばれ、軽々と「次の所長にお願いすることになったから」と言われました。即座にお断りし、研究室に戻ったら海外留学中のS先生からメールが入っている。「千晶さん、今度の教養研究センターの所長って本当ですか？」おおい、ちょっと待て。すぐさまセンターのコーディネーターだった理工学部のK先生にメールすると「確かに企画ボードの会議で発表があったから、横山さん、OKしたんだ、偉いなあって思っていた」とおっしゃる。その後のすったもんだはまあ、脇に置くとして、私はなぜかしら偉大な羽田先生の後の2代目として教養研究センターの所長になってしまいました。世の非情と非合理を身をもって知った夏でした。

今から考えてみたら、人生はこれだから楽しいのでしょうか。ありがたいことに、まず羽田先生と宮坂敦子さんと宮木さえみさんをはじめとする教職員の方々がしっかりと土台を作っておいてくれました。集ってくるメンバーはエキストラの業務を夢の実現へと変えていくドライブを持っています。皆、教職員でもあり、学生でもある。こんな授業を受けたかったという夢を実現するために教員、そして学生がともに大いに遊びつつ、夢の実現を果たしてしまう。そんなメンバーのはしゃぎぶりをたしなめつつも支えてくれる素晴らしい職員のみなさん。こんな場所は他の大学でもそうそう見られないのではないのでしょうか。その証拠に3代目の不破有理所長にバトンを渡した後も、私にとって教養研究センターはなくてはならない居場所です。結局、もう8年も前になるあの忘れられない夏にちよっぴり感謝したくなるのです。

**不破有理（2010年～ 所長）****財産を散逸させないために——相続人のつぶやき**

「次は不破さんだから」と言われたのは庄内セミナーで移動中の車の中。「それは絶対ありえません」と即座に答え、一瞬凍った車の雰囲気。「あれ？ 冗談じゃなかったの？」と妙な気配を感じたものの「まさか」と不安を一蹴。秋も深まった折、再度、会議の際に「次期の所長を決めなくてはならない」と切り出され、「誰になるのかな」と他人事を決め込んでいると、所長・副所長の目が私に注がれ、私は目が点。通常、あまり断らないタイプだが、所長とはさすがに安請け合いすべきではない職であることは理解できました。悩み、ぐずり、駄々をこねましたが、結局、期間限定でご奉公せざるをえないのか、と諦観。そして羽田初代所長、横山前所長からの大きな財産を引き継ぐことになりました。

教育GPという大きなプロジェクトが動き、ルールに乗って走った初年度、そしていよいよ最終年となりました。これからが勝負どころとなります。幸い、教育GP報告会で外部評価委員から、大学教育のあり方について深く多面的に構想し実践して検証しようとする「知の革新」との高い評価をいただきました。センター開所10年を迎え、センターの教育基盤である「アカデミック・スキルズ」のさらなる充実化と汎用性ある手法を塾内外に発信する予定。学部横断の組織であるからこそ可能な俯瞰的な視点から、義塾に蓄えられた素晴らしい知的集積を、ささやかでも取り結ぶ活動を広げて教育と研究環境の拡充に邁進したい。しかしながらそのために協力を仰ぐと、結果として皆さんのお時間を奪い、研究・教育の時間が不足してしまう、という連鎖が目下のジレンマです。嗚呼。

**日水邦昭（2008年～ センター事務）****新たな気づき**

教養研究センターに着任して4年になります。当時は学術フロンティア推進事業が終了し、その成果の実践の場として「鶴岡セミナー」の開催や、次の外部資金獲得に向けて構想を練っていたころでもありました。これまで「身体知」をキーワードとして展開してきた実績を基に、比類ない教養教育の実践として文部科学省の「教育GP」が採択され、さまざまな企画がボランティアベースで、精神的に切れ間なく展開されてきました。その中で職員の関わりとしては、教養研究センターの設立理念として教職員が一体となって取り組むことを掲げていますが、全ての企画のなかで職員が教育に関わるさまざまな場面で直接コミットできる職場は他にはなく、その言動には責任を感じているところです。この節目に思うことは、教養研究センター発足当時から研究成果を絶えず発信続けることが使命のように期待されていますが、ここでちょっと立ち止まって振り返り、これまでの活動を検証する時間はあるのではないのでしょうか。そこでの新たな気づきが、今後のセンターの活動が200名を超える所員を後ろ盾に多分野の人材の宝庫の日吉キャンパスを舞台として、教養教育の屋台を支える重要な柱となることを期待しています。

**学生論文コンテスト**

慶應義塾大学全学部の1,2年生を対象に、論文コンテストを開催します。論文作成セミナーを実施し、「学習サポート」とも連携して、学生の論文作成力向上を図ります。協賛企業の寄附を得て優秀者には副賞を準備中。6月に募集要項を発表する予定です。

**アカデミック・スキルズ @ iTunes U**

教養研究センターの看板授業「アカスキ」で伝授されるさまざまな知の「スキル」を10分間のミニ講義として映像化、iTunes Uで公開します。過去にアカスキを担当いただいた先生方にご登場いただき10年をふり返るとともに、書籍と連携しながら基本スキルをアーカイブ化し、「顔の見える」授業を発信していきます。

**学習サポート書籍刊行**

アカスキOB・OGが活躍するピア・メンタリング学習サポートによる図書館展示の内でもとりわけ好評だったレポート展示企画が書籍化されます。

**学びの連携**

各キャンパスに培われてきた学習活性化の活動を連携・交流させる取組み。考え続ける人間を育てるための教育メソッド構築を目指して、つなげ、ひろげる、をキーワードに教養研究センターが「知の共有地」のハブとなり、学びのメソッドを開発します。

**日吉キャンパス公開講座**

今年度の公開講座は教員公募企画です。そのひとつ「みちのく見聞録——学びの旅のすゝめ」では、連続講義で東北の知る人ぞ知る歴史・文化スポットを紹介し、秋も深まる頃、JTBの協力を得て、希望者のみなさんを現地への旅に誘います。

**アカスキOB・OGリユニオン**

アカスキクラスの中で培われる学部を越えた横のつながりだけでなく、年度を越えた縦のつながり加えることで、未来につながるアカスキ・ネットワーク形成のきっかけとします。2013年2月のアカスキ・コンペでリユニオンを予定しています。

**『アカデミック・スキルズ』書籍シリーズ刊行**

「アカデミック・スキルズ」の成果をまとめた書籍として、2005年に『アカデミック・スキルズ』（慶應義塾大学出版会）が刊行され、現在様々な大学で学習方法の教科書として利用されるなど高い評価を得ています。この6年間でさらに磨きを増した“スキル”をまとめ、シリーズ化刊行を企画しています。今秋より『アカデミック・スキルズ』の改訂版を含む3冊をまずは刊行予定です。

（吉田恭子）

# 教育 GP を終えて

## セクションI「アート」

声は力。声は頭脳。

声には考える力があるといわれます。しゃべっているうちに、思ってもみなかったことを口が話し出す経験を持つ人も多いのではないのでしょうか。頭だけでなく、しゃべりながら自分の考えを明確化させることができる。アート・セクションでは、声を用いた活動が多く取り入れられました。例えば文学テキストを音読し、議論し、批評を語り創作を発表する。古典を脚本化して、演じてみる。キャンパスに自作の詩を朗読する学生の声が響く。詩人が朗読と映像の合体を演じる。音楽ではもちろん合唱し楽器を「歌わせ」、映像制作では創作への準備段階で徹底的に議論がされ脚本をまとめ演じる、といった活動が繰り返されました。活動を通して、文字テキストの多様な読みを得ただけでなく、読みを抽象化させ、発想法や新たな視点を得る学習につながったという声がアンケートに寄せられたのは予想外の成果でした。実験的な取り組みは正規授業の中でも応用され、センター科目として「アカデミック・スキルズⅢ・Ⅳ」として批評と創作の映像クラスが、そして夏季集中講座「身体知-創造的コミュニケーションと言語力」、さらに今年度から「身体知・音楽I・II」が新設されました。外部評価委員からも「言語-身体知-一言語」という循環が作られており、本取り組みの象徴的な活動との評をいただきました。今後、文学・アートをを用いた教授法についてまとめ、刊行を目指す予定です。

(不破有理)



## セクションII「フィールド・アクティビティ」

フィールドワークの楽しさと難しさ

本セクションは、フィールド活動を中心とする身体知教育型授業を通して、主に社会システムについての知識・理解を深めるもので、協働力開発を通じて学術言語力とメディア言語力育成を目指しました。

「社会学のフィールドワーク」では、障害を持った他者への聞き取りおよび日吉地域を主題にしたフィールドワークを行い、身体知的遭遇によって引き起こされる諸発見、諸問題を生々しく体験するとともに、反面その体験を心身的に深めることに限界が見いだされました。

「地域との対話」では、日吉や元住吉をフィールドとして、商店街や地域コミュニティの活性化、障害者支援などについてフィールドワークを行いました。フィールドワークのリテラシーや身体知的コミュニケーションの重要性への気づきが涵養された一方、体験の言語化によりきめ細かい指導が必要とされること、また授業運営上の種々の問題点も浮き彫りにされました。

「現場に出て、地域振興の問題を考える」では、高山市、川越市、八丈島などをフィールドとして、実地調査の技法の習得を目指しました。参加した学生の満足度が高かった反面、その「楽しさ」を学問的充実度につなげるための仕掛けが不足していると感じられました。また、学生の積極度は、当該授業が教育GPの一環であるか否かに関わらないかもしれない、という印象を抱きました。

本セクションでの試みは、概して、身体知レベルでの気づき、他者理解が誘発される一方で、そのさらなる実存的深まり、あるいは学術的昇華に関しては、さまざまな課題を残したと思われます。

(熊倉敬聡)

## セクションIII「コミュニティ」

本当に必要とされる試みを目指して

「コミュニティ」セクションの活動は、そのすべてが「生身」です。その場に出かけて人と話し、体験し、実際に場を共有した人々と協働で発信していく。その活動の中で様々な新しい学びのコミュニティが開かれていきました。ここでは主にふたつの活動を挙げましょう。

まず紹介したいのは、港区にあるコミュニティづくりの活動拠点「芝の家」で開催されたコミュニティ菜園の試みです。多世代・多文化のメンバー同士の交流の場の創出を目指したこの試みでは、植物の里親事業、町会と連携した地域内緑地の花壇での活動、収穫祭やアートワークショップの実施、高齢者在宅支援センターと連携した植物による交流事業など、「緑」を中心に多様な人々がつながるネットワークが立ち上がり、今も活動を続けています。

現在慶應の近くにある「三田の家」、「芝の家」というふたつの拠点では、慶應生たちも活発にかかわっています。そのあとに横浜中区の寿地区の近くに開かれたのが「カドベヤ」です。寿ではこのGP事業として、ふたつの活動が開始されました。ひとつは寿地区の独居老人を見守りつつ、場所と人から学ぶ「寿物語プロジェクト」。そして今ひとつが「カドベヤ」を中心とした身体ワークショップの開催です。横浜の発達の影響に隠れた部分といえる寿地区は、おそらく10年後の高齢化社会の縮図でもあります。そのような町で互いのバックグラウンドにかかわらず多様な人々が一堂に会し、交流し、互いに見守っていく場が現在醸成されつつあります。

有り難いことにいずれの取り組みも最終報告会では外部審査員の方々から高い評価をいただきました。しかし「カドベヤ」はGP終了後、自立の道を歩むことになります。これから初めて、本事業が地域の必要とする試みなのかどうか真に問われるはず。見守っていただきたいと思います。

(横山千晶)

## セクションIV「コミュニケーション」

自己との対話、他者との対話

教養研究センター2010年度カリキュラム研究のアンケートでは、教員が学生に身につけて欲しい教養の1位から3位は、「考える力や判断力」、「文化や歴史に関する理解」、「コミュニケーション能力」です。教養言語力で私達がめざすコミュニケーション力とは、この1と3を繋げ支えるものです。対自、対他のコミュニケーション学習を通して、自己理解や自己の全体性の回復を志向しました。参加型ワークショップ形式を中心に、物語制作とドラマ化、瞑想体験、合宿エンカウンター・グループ、絵とストーリーづくりなど多様な手法を用い、身体やアート表現を介在させ、一貫して言語と非言語、意識と無意識、左脳と右脳の間の往還を促しました。一見コミュニケーションと関係なさそうな学習が、自己表現や他者をつなげる驚きや喜び、高い満足感、確かな学びの感触を生じさせ、自分と他者への多様なコミュニケーションの可能性に目覚めた参加者は日々のコミュニケーションへの動機づけを高めました。参加した学生にはコミュニケーションの核にあるべき自己や他者にオープンに向き合う力がついていたと思われませんが、まだプロジェクトは序にすぎたばかりです。この3年彼らと共に学び成長を支えてきた身として、そこで蓄えられた身体知の蓄積を今後の教育実践にどう生かせるかを新たな課題と感じています。

(手塚千鶴子)



## セクションV「発信・評価・システムデザイン」

エディティング・スキルズ、これまで、これから

第Vセクションは大きく二つの柱から成り立っています。一つは各セクションの成果を公表・発信するものです。もう一つは各セクションの試みに対する評価法の構築です。このうち私が主に関わったのは前者の方でしたので、その点についてご説明します。一般に成果の公表・発信は業者などに発注するものですが、このGPでは公表・発信も学生の教養言語力の育成に利用しようとしたところに特徴があります。つまり成果物を公表するための編集作業も学生の手で行わせようと考えたのです。これを受けて立ち上がったのが、エディティング・スキルズという実験授業でした。学生に編集・出版・販売といった一連の流れを体験させることで、さまざまなレベルの言語力を身につけさせようという目標を掲げ、慶應義塾大学出版会の協力のもと、雑誌の編集や、装幀家の田仲葉さんを講師に招いての製本教室、生協でのブック・フェアの開催などを行ってきました。私たちはここで展開した試みを評価する場合、完成度の高さではなく、これを通して学生がどれだけ自己を開拓できたかを基準に据えてきました。ところで一方、各セクションの成果を公表するという点は十分に機能しなかったという反省点があります。これは学生が1年ごとに入れ替わってしまうので、ノウハウが蓄積されないことに起因します。エディティング・スキルズは実験授業として今年度も継続して開講しますが、今後はさまざまな試みの公表に際して編集を請け負えるようなノウハウをどのように継承していくかが課題となるでしょう。

(大出 敦)



## 庄内セミナー

### ふたたび庄内へ！

庄内セミナー（慶應義塾未来先導基金 2012 年度公募プログラム）は、今夏の開催を目指して1月末にスタッフによる準備を始めました。過去3回のセミナーの実績を踏まえ、以下のような趣旨・目的で「庄内セミナー」を開催したいと考えております。すなわち、① 鶴岡市、TTCKを拠点として新たな「学びの場」を開発する、② 鳥海山・出羽三山、庄内平野、日本海に囲まれ、歴史・文化・自然・人の織りなす多彩な「生命<sup>いのち</sup>」に恵まれた庄内をフィールドとして活用する、③ 忙しい日常から離れて、じっくりと「生命」について考え、地元との交流なども図りつつ、各自の考えを交換することで考える力や話し合う力を養う機会を設ける、の3点です。

具体的には、「庄内に学ぶ生命——いま敢えて生と死を考える」をテーマに、学部生（留学生も含む）・大学院生・社会人を対象として8月31日から9月3日まで開催します。主な内容は、即身仏拝観・ミニ山伏体験・先端生命研の見学・生命や地元の歴史、文化などに関する講義・議論と対話などです。定員は28名（申込が定員を超えた場合は抽選）。現地集合・解散なので、現地までの往復交通費と旅行保険代は自己負担となります。

ただ、参加学生には未来先導基金による「庄内セミナー奨学金」が授与されます（宿泊費等に充当）ので軽い負担での参加が可能となっています。募集要領などについては5月中旬頃にセンターのHPなどであらためてお知らせします。

先生方には、学生への積極的な参加を呼びかけていただけると幸いです。よろしく願いたします。（羽田 功）

### 「庄内セミナー」でしか得られない体験

情報技術の急激な進展にともない、インターネットを介してさまざまな情報を入手できるようになりました。大学では、その情報をうまく取捨選択して必要なものだけを活用・習得していく力——「情報リテラシー」を学生に教育していくことが強く求められるようになっていきます。しかし、物事の本質を見極めるには実際に足を運び、歩き回って人に会い、話をして感じてみるのが重要であることは言うまでもありません。そういう学びの形態を実践したい、との思いからスタートしたのが「庄内セミナー」なのだと思います。

過去3回のセミナー共通の総合テーマは「庄内に学ぶ生命」。さらに年ごとに「生命の源——死を想い、生きることを考える」「激動の時代を生き抜く——松ヶ岡開墾場に学ぶ生命のつながり」「芭蕉が見た庄内の生命」というテーマを設定し、それぞれ羽黒修験と即身仏、松ヶ岡での開墾事業と藩校・致道館における徂徠学、松尾芭蕉と『おくの細道』に焦点を当て、多様なフィールド・アクティビティを行いました。

参加した学生が、自身のそれまでの価値観を大きく揺さぶられるような“密度の濃い時間”を過ごしたことは間違いありません。それは、報告書にまとめられたレポートをご覧いただければおわかりいただけます。都会のキャンパスにいただけでは経験することのできないような“異次元の”体験を通じ、「自立・自律力」と「社交力」の涵養を通した「教養」の基礎体力トレーニングを実践し、真に意識の高い社会の先導者を養成すること——これこそが「庄内セミナー」の大きな目的のひとつなのです。

（慶應義塾大学出版会 小磯勝人）

## 教養研究センター選書自著紹介

### 教養研究センター選書 11

#### 産む身体を描く — ドイツ・イギリスの近代産科医と解剖図

解剖図、メス、<sup>かんし</sup>クロロフォルム麻酔といった少し怖い単語が頻出する本書は、専門が異なる3名の研究者が、18・19世紀の医学（特に産科）と絵画芸術の密接な結びつきについて書いた面白い作品です。舞台は詩人ゲーテを起点とし、ドイツの大学町イエーナの産院とヴァイマル自由絵画学校からザクセンの王都ドレスデンへ、そこで活躍したロマン派画家兼産科医カールスに導かれて、さらにイギリスに移行します。最終章にあるM.シェリーのゴシック小説『フランケンシュタイン』と解剖図に関する言及も見逃せません。でもこの文が活字になる頃、日吉に私の姿はないはず。爽やかな緑の風とともに、本書に込めた感謝の気持ちが届きますように！

（東京大学大学院総合文化研究科准教授 石原あえか）



## 研究サポート「研究の現場から」

### 中国映画のあれこれ

私の専門は、中国近現代文学・中国映画史です。近年は、毛沢東に批判され、その後の文芸界に多大な影響を与えた映画『武訓伝』と、その監督・孫瑜に注目しています。また、日吉電影節という、中国語圏の最新の映画を紹介するイベントも運営しています。

近年の中国映画では、多くの問題を抱える中国社会の現実にとらわれ、「ソウゾウリョク（想像力・創造力）」が十分に発揮されていないと感じる作品が少なくありません。その一因が、1930年代の左翼映画批評にはじまる想像力の軽視や多義性排除の傾向にあるのではないかという、研究とイベント（「あれ」と「これ」）のなかで考えたことをお話ししました。

（吉川龍生）

### 〇〇が好評につき…！

来往舎サロン「研究の現場から」は、美味しいあれこれをつまみながら、先生方の研究について自由にお話しいただく会です。毎回、学部・専門を越えて盛り上がる研究談義に、日吉の多様性と潜在力を実感し、自身の研究の刺激となること請け合い、人呼んで来往舎のゴールデンタイム「研究の現場から」！ 今後の予定は以下の通り。（以下敬称略）

第4回 5月24日 18:15～

中尾麻伊香（日本学術振興会特別研究員（PD））

「原爆と病のイメージ——医学と文学の狭間で」

折井善果（法学部）「キリシタン版研究の今——和書と洋書のあいだ」

第5回 10月11日 18:15～

岩下綾（法学部）「フランソワ・ラブレールの描写技巧——修辭と奇想のさじ加減」

光田達矢（経済学部）「転倒するウマの対処法——19世紀末ヨーロッパ都市の試み」

参加は予約・申込不要です。教職員のみなさまの参加をお待ちしております。（吉田恭子）

### 教養研究センター選書 12

#### 汎瞑想 — もう一つの生活、もう一つの文明へ

東日本大震災から1年。行政による復興作業は遅々として進んでいません。にもかかわらず、市民の間では、これまでの資本主義的生活・文明から“もう一つの”生活・文明を目指そうと、大小様々な変革の動きが生まれています。もちろん、エネルギーや社会制度の変革も最重要ですが、それを真に人間存在に根づかせるためには“精神性”の変革も同様に重要ではないでしょうか？ 私は“瞑想”こそ、その変革の核になると思っています。“瞑想”の現代的・文明的可能性を、自らの体験と思想的考察との螺旋的深まりにより探究した軌跡が、本書となりました。（熊倉敬聡）

\*今年度も選書原稿を公募します。事前申込締切は7月27日（金）、原稿の締切は9月28日（金）です。今年度は応募要領が大幅に変更されますのでご注意ください。

### 瀧口修造とカタルーニャの芸術家たち

2年ほど前、マドリド・コンプルテンセ大学のピラール・カバリーニャス教授やイサーク・モレーノ訪問講師（商学部）と共に慶應義塾大学アート・センターが所蔵する瀧口修造アーカイヴの調査を始めました。その過程で瀧口修造とカタルーニャの芸術家たちが密接に交流していた事実が明らかになっていきました。

瀧口は日本にスペインの現代美術を紹介しただけではなく、カタルーニャの芸術家たちと親密な交友関係を結び、同時に作品の共同制作を行っています。一般的なジャポニスム研究においてほとんど注目されることのないスペインが、実は戦後も日本と密接な文化交流を重ねていたことに新鮮な驚きを感じながら研究を進めているところです。

（松田健児）

### 注目！ 研究会助成制度

学会・ワークショップなどの開催支援制度が今年から本格化します。この助成制度は教養研究センターの所員が企画する研究会やワークショップを支援することによって、さまざまな研究・教育の企画が日吉で開催される機会を増やすこと、また所員に公開していただき日吉における研究の情報交換の場を広げることを目的とします。助成は開催に伴う経費（謝金、印刷費など1件上限10万円）と日吉キャンパス内の広報の支援を負担します。年2回1月と7月の月上旬に締め切り、結果はそれぞれの月末にお知らせします。今回は7月6日が締切ですので奮ってご応募ください。詳細は教養研究センター事務室へどうぞ。

### 求ム・来往最前線情報！

所員の方々の研究・教育のご紹介をします。勉強会、研究会、講演会、ワークショップのお知らせ（日時・内容・研究会名・担当教員・連絡先）、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下さい。教養研究センターへ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

（不破有理）

【HAPP】塾長と日吉の森を歩こう

4月21日(土) まむし谷、来往舎大会議室

【研究の現場から】中尾麻伊香, 折井善果

5月24日(木) 来往舎 101/102 →特集V

【HAPP】環境週間 2012

6月4日(月)～6月9日(土)

【HAPP】室内アンサンブル・フェスタII

古楽器によるバロック音楽の演奏会:7月2日(月)  
 出演者公募による室内楽マラソンコンサート:7月6日(金)  
 慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会:7月18日(水)  
 協生館藤原記念ホール  
 公開マスタークラス:6月下旬～7月上旬予定  
 来往舎シンポジウムスペース

【学会・ワークショップ等開催支援制度】秋学期開催分募集

申請締切 7月6日(金)  
 結果発表 7月31日(火)

【HAPP】OTOの余韻(仮)

10月6日(土) 来往舎イベントテラス

【日吉キャンパス公開講座】

「日本ってなんだろう?」

【開所10年記念企画】「東北の再発見」9月29日開講

【日中国交正常化40周年記念集中講座】(仮)

9月29日(土)～12月中旬

【開所10年記念企画】東北「学びの旅のすゝめ」

募集 7月～10月末日

4月

7月

10月

【HAPP】富山妙子作品展&講演会  
 記憶の糸を紡ぐ 震災・戦争・女

作品展:5月8日(火)～15日(火) 来往舎ギャラリー  
 講演会:5月12日(土) 来往舎イベントテラス

【HAPP】川瀬撰講演会「震災はまだ終わっていない  
 ——南三陸の海の現状と今後」

6月1日(金) 第4校舎B棟12番教室

【HAPP】心を渡る、魂を渡す～ふたつの魂の舞踏(仮)

6月13日(水) 来往舎イベントテラス

【教養研究センター選書原稿募集】

事前申込 7月27日(金)  
 原稿締切 9月28日(金)

【未来先導基金公募プログラム 庄内セミナー】  
 庄内に学ぶ生命——いま敢えて生と死を考える

募集 5月中旬～  
 合宿 8月31日(金)～9月3日(月) 山形県鶴岡市

【研究の現場から】光田達也, 岩下綾

10月11日(木) 来往舎101/102 →特集V

【開所10年記念企画】学生論文コンテスト

募集 6月～ 締切 11月

\*各イベントへのお問い合わせは、toiawase-lib@adst.keio.ac.jpまで

私のマルマル自慢

➤の企画がスタートした際、武藤浩史先生から、靴自慢をしたらどうでしょうとアドバイスをいただいたので、大好きな「靴」について書かせていただきます。  
 ➤外出が大好きな私にとって、靴はなくてはならないオシャレの一つ。靴選びのポイントは、① 偏平足・外反母趾・幅広の私の足が、長時間履いていても痛くならないこと。② 流行は取り入れたい。③ 背が低いので、できればヒールが欲しい。この3つが私の靴選びポイントになります。こうして巡り合った靴を履いて外出をすると、背筋も伸びて、ウキウキします！  
 私の靴好きは普段の私服用だけでなく、趣味のジムでの運動用スニーカーにまでおよびます。  
 こちらの靴選びのポイントは、① とにかくオシャレ！ ② 白がベース。運動もオシャレにしたいという、完全に「形から入るタイプ」です(笑)。そんな私の最近の靴の悩みは、職場用の靴のビジュアルがよく取れることです。お転婆だからなのかなんなのか……  
 こんな私ですが、どうぞ宜しくお願い致します。

(下田和実)

